

平年収量が増減する都道府県の生産事情 (詳細版)

大臣官房統計部

令和 6 年 3 月 1 2 日

農林水産省

北海道（前回変動:令和5年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

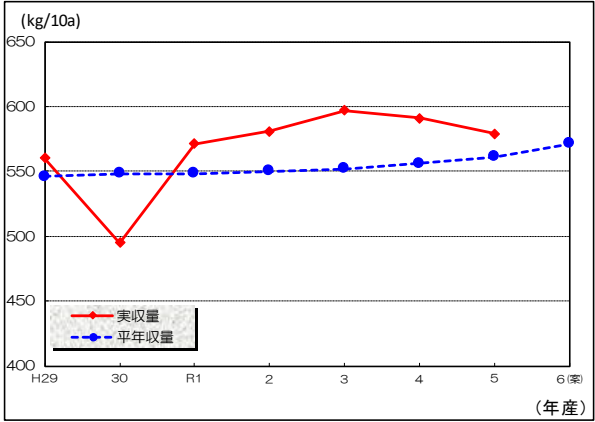
令和6年産水稻の10a当たり平年収量は571kg（対前年差+10kg）となった。
これは、主な生産事情として、冷害による極端な減収リスクが低下し、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

北海道における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

図1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準
北海道



北海道	H29	30	R1	2	3	4	5	6(案)
実収量	560	495	571	581	597	591	579	
7中5平均	576 (15)							
平年収量	546	548	548	550	552	556	561	571
前年差	5	2	0	2	2	4	5	10

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表1 品種別作付面積割合の動向

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準が高い「ななつぼし」中心の品種構成となっている。令和6年産も同様に推移するものと見込まれる。
(表1)

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R1	2	3	4	5
ななつぼし	603	45.8	45.0	45.7	44.9	45.3
ゆめびりか	580	21.7	20.9	23.4	25.9	24.9
きらら397	619	9.5	10.0	9.1	7.0	7.0
ふっくりんこ	576	6.2	5.9	6.5	6.3	6.4
*風の子もち	600	3.1	3.3	3.4	3.4	3.4
えみまる	544	0.0	1.2	1.6	2.1	2.5
*はくちょうもち	618	2.4	2.3	2.5	2.4	2.4

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。
3 *印はもち米である。

表2 作柄地帯別作付面積割合の動向

作柄地帯別作付面積割合をみると、収量水準が高い「上川」、「北空知」、「南空知」中心に作付けされている。
(表2)

地域（地帯）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R1	2	3	4	5
石狩	560	7.0	7.1	7.0	6.9	6.9
南空知	565	17.9	17.7	16.6	15.4	15.2
北空知	598	25.9	26.0	26.5	26.8	27.0
上川	602	28.4	28.2	28.8	29.5	29.4
留萌	549	4.0	4.0	4.1	4.2	4.2
渡島・檜山	515	6.7	6.8	6.7	6.9	6.9
後志	543	4.5	4.5	4.5	4.5	4.6
胆振・日高	523	4.6	4.7	4.8	4.8	4.8
オホーツク・十勝	545	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 収量構成要素と作柄

収量構成要素については、平成19年から25年の平均値と平成29年から令和5年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が0.3ポイント増加し、千もみ当たり収量が4.2ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は5.1ポイント増加している。

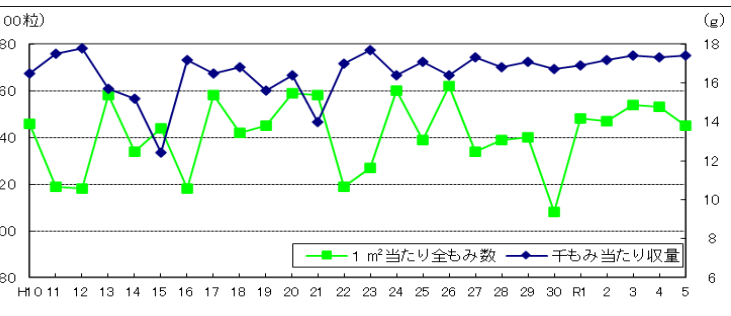
これは、今と昔の気温の平年値を比較すると穎花分化から減数分裂期の気温が高めで推移し、冷害リスクが低減したことと、登熟初期の気温が高温になりすぎずに推移し登熟が進んだことによるものと考えられる。（表3、4、図2）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	H19～H25年 平均値 ①	令和元年	2	3	4	5	対前年差	H29～R5年 平均値 ②	③= ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数（株）	22.5	21.9	21.9	21.8	21.8	21.9	0.1	21.9	97.3	△ 2.7
1㎡当たり有効穂数（本）	562	599	538	574	540	561	21.0	550	97.9	△ 2.1
1穂当たりもみ数（粒）	61.7	58.1	64.5	61.7	65.4	61.5	△ 3.9	62.5	101.3	1.3
1㎡当たり全もみ数（百粒）	346	348	347	354	353	345	△ 8.0	347	100.3	0.3
千もみ当たり収量（g）	16.5	16.9	17.2	17.4	17.3	17.4	0.1	17.2	104.2	4.2
玄米千粒重（g）	21.6	21.2	21.9	21.8	22.2	21.8	△ 0.4	21.8	100.9	0.9
10a当たり玄米重（kg）	566	588	598	616	609	599	△ 10.0	595	105.1	5.1
前40日平均気温（℃）	0.6	1.1	0.4	2.3	2.3	2.5	0.2	1.6		1.0
後40日平均気温（℃）	0.9	0.4	1.7	1.0	0.5	4.0	3.5	0.5		△ 0.4

資料：作物統計、アメダスデータ（気象庁）
注：1 アメダスデータ（平均気温）は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均（対平年差）。
注：2 H19～H25年平均値及びH29～R5年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表4 最近の作柄（平成29年度以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最 況終 指 数）
H29	—	○	103
30	※	—	90
R1	○	—	104
2	○	○	106
3	○	○	108
4	○	○	106
5	○	○	104

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

(参考) 栽培技術等の動向

健苗の育成や稲体の耐冷素質の向上を図り、良質・良食味米の安定生産に向け①育苗管理の徹底②深水管理とそれを可能とする畦畔整備③地力増進やほ場の透水性改善④防風対策等の栽培環境整備⑤適正施肥などの基本技術を守った栽培管理⑥いもち病予防のための薬剤消毒の徹底等の指導が行われている。

- ・ 農家戸数が減少する一方で1戸当たりの作付面積は増加傾向で推移し、労働不足に直面していることから「高密度播種」による育苗の増加が見込まれる。
- ・ 成苗移植の普及など安定生産に向けた栽培技術が定着している。

表5 主要3地帯における気温の平年値前回差(1991～2020平年値－1981～2010平年値)

	南空知(岩見沢)			北空知(滝川)			上川(旭川)			生育 ステージ
	平均気温	最高気温	最低気温	平均気温	最高気温	最低気温	平均気温	最高気温	最低気温	
1	0.6	0.6	0.6	0.4	0.3	0.6	0.6	0.2	0.5	えい花分 化期～減 数分裂期
7 2	0.6	0.7	0.6	0.5	0.4	0.6	0.5	0.3	0.6	
3	0.5	0.7	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.4	
4	0.4	0.6	0.3	0.4	0.4	0.2	0.4	0.6	0.2	
月 5	0.3	0.4	0.2	0.3	0.3	0.3	0.4	0.5	0.4	
6	0.2	0.3	0.3	0.2	0.2	0.4	0.4	0.4	0.4	
1	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.2	0.2	0.3	0.3	出穂・ 開花期
8 2	0.0	0.0	0.1	0.0	-0.1	0.1	0.0	0.2	0.1	
3	0.0	-0.2	0.1	0.0	-0.3	0.1	0.0	0.1	0.2	
4	0.0	-0.1	0.1	-0.1	-0.4	0.1	0.0	0.0	0.2	
月 5	0.1	0.1	0.0	-0.1	-0.2	0.1	0.1	0.2	0.2	
6	0.1	0.3	0.1	0.1	0.0	0.1	0.3	0.3	0.2	

青 森（前回変動:令和4年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和6年産水稻の10a当たり平年収量は607kg（対前年差+4kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であることや、冷害による極端な減収リスクが低下し、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

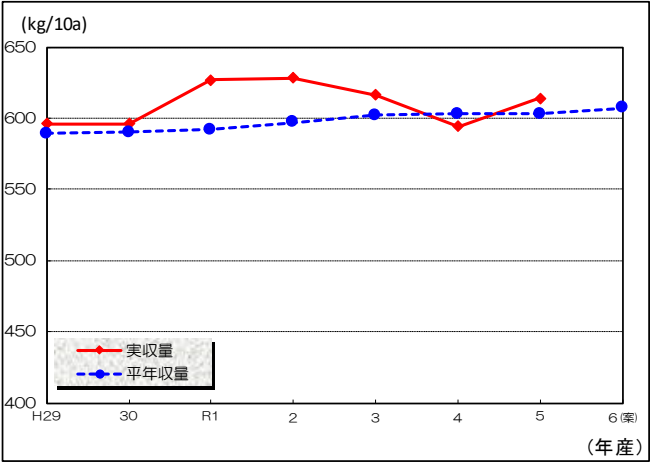
2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

青森県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

図1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

青 森



青 森	H29	30	R1	2	3	4	5	6(案)
実収量	596	596	627	628	616	594	614	
7中5平均	610 (7)							
平年収量	589	590	592	597	602	603	603	607
前年差	3	1	2	5	5	1	0	4

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R1	2	3	4	5
まっしぐら	616	67.5	75.5	78.6	80.7	79.2
つがるロマン	583	25.2	17.3	13.6	11.8	7.0
青天の霹靂	591	3.5	3.7	4.5	4.5	5.6
はれわたり	620	0.0	0.0	0.0	0.0	4.8

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R1	2	3	4	5
青森	599	11.6	11.5	11.0	11.4	11.5
津軽	632	61.1	60.8	61.9	62.4	62.3
南部・下北	571	27.3	27.7	27.1	26.2	26.2

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、「つがるロマン」から、収量水準の高い「はれわたり」、「青天の霹靂」への移行が増加傾向にあり、令和6年産も同様の傾向になるものと考えられる。

(表1)

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、地帯間差があり、令和6年産も収量水準の高い津軽地帯の作付面積の割合が引き続き高いことが見込まれる。

(表2)

(3) 収量構成要素と作柄

収量構成要素については、平成19年から25年の平均値と平成29年から令和5年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が1.6ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が3.3ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は2.1ポイント増加している。

近年の温暖化により「やませ」等低温による被害が大きく減少しているほか、気温が高めに推移する傾向にあるため、近年の収量水準が平年収量を上回って推移している。

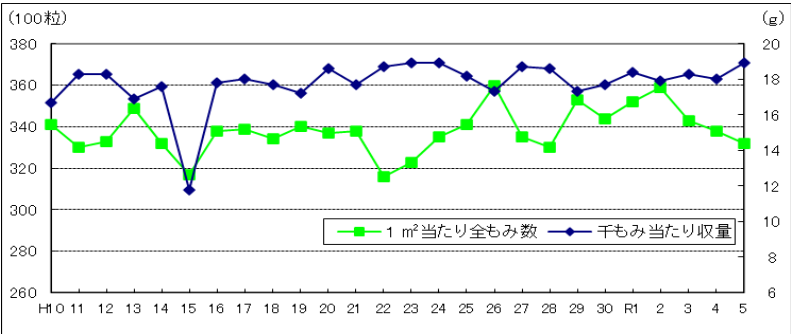
(表3、表4、図2)

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	H19～H25年 平均値 ①	令和元年	2	3	4	5	対前年差	H29～R5年 平均値 ②	③= ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	20.9	19.6	19.6	19.3	18.8	18.9	0.1	19.3	92.3	△7.7
1㎡当たり有効穂数(本)	415	455	442	435	405	406	1.0	422	101.7	1.7
1穂当たりもみ数(粒)	80.2	77.4	81.2	78.9	83.5	81.8	△1.7	81.8	102.0	2.0
1㎡当たり全もみ数(百粒)	335	352	359	343	338	332	△6.0	346	103.3	3.3
千もみ当たり収量(g)	18.4	18.4	17.9	18.3	18.0	18.9	0.9	18.1	98.4	△1.6
玄米千粒重(g)	22.1	22.2	21.6	22.3	22.2	22.2	0.0	22.2	100.5	0.5
10a当たり玄米重(kg)	610	646	642	628	607	626	19.0	623	102.1	2.1
前40日平均気温(℃)	0.4	0.8	0.0	2.0	2.3	3.0	0.7	1.7		1.3
後40日平均気温(℃)	1.1	1.0	2.0	△0.3	0.4	4.2	3.8	0.5		△0.6

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 H19～H25年平均値及びH29～R5年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び 千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表4 最近の作柄(平成29年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作況最終指数)
H29	◎	×	101
30	○	×	101
R1	○	○	106
2	◎	—	105
3	—	—	102
4	×	—	99
5	×	○	102

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、
—：平年並み、×：やや不良(やや少ない)、
※：不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

- ・ 高品質・良食味米の安定生産に向け①適地・適品種の作付誘導②高温や低温等気象変動に対応した適正な水管理や適期刈取等の徹底③施肥管理及び斑点米カメムシ類等の防除の徹底等の指導が行われている。

岩 手（前回変動:令和3年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和6年産水稻の10a当たり平年収量は544kg（対前年差＋4kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であることや、冷害による極端な減収リスクが低下し、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

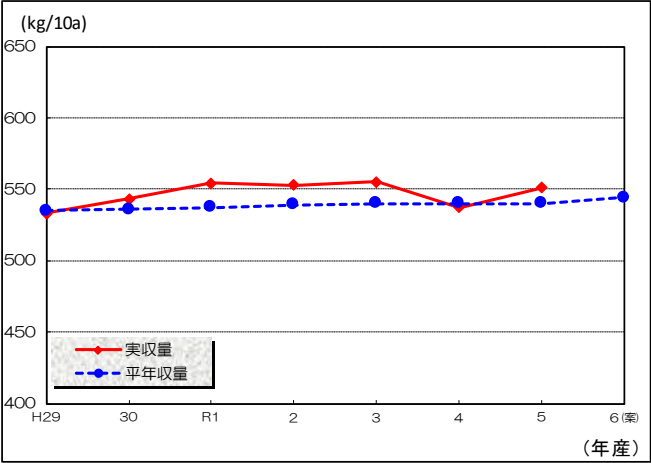
2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10a 当たり収量と平年収量の水準

岩手県における近年の10a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

図1 近年の10a 当たり収量と平年収量の水準

岩 手



岩 手	H29	30	R1	2	3	4	5	6(案)
実収量	533	543	554	553	555	537	551	
7中5平均	548 (8)							
平年収量	535	536	537	539	540	540	540	544
前年差	1	1	1	2	1	0	0	4

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「銀河のしずく」が増加傾向にあり、令和6年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R1	2	3	4	5
ひとめぼれ	554	68.9	69.0	69.3	69.5	66.8
						-2.5
銀河のしずく	582	3.0	3.3	3.7	5.2	10.2
						+6.5
あきたこまち	551	14.7	14.6	14.3	13.5	12.0
						-2.3
いわてっこ	546	4.8	4.9	4.8	4.5	4.3
						-0.5

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R1	2	3	4	5
北上川上流	568	24.8	24.8	25.0	24.7	25.0
北上川下流	544	68.3	68.3	68.3	68.9	68.6
東部	496	2.5	2.5	2.3	2.3	2.2
北部	522	4.4	4.4	4.4	4.1	4.2

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 収量構成要素と作柄

収量構成要素については、平成19年から25年の平均値と平成29年から令和5年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が1.6ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が1.0ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は0.2ポイント増加している。

近年の温暖化により「やませ」等低温による被害が大きく減少している。さらに、気温が高めに推移する傾向にあるため、近年の収量水準が平年収量を上回って推移している。

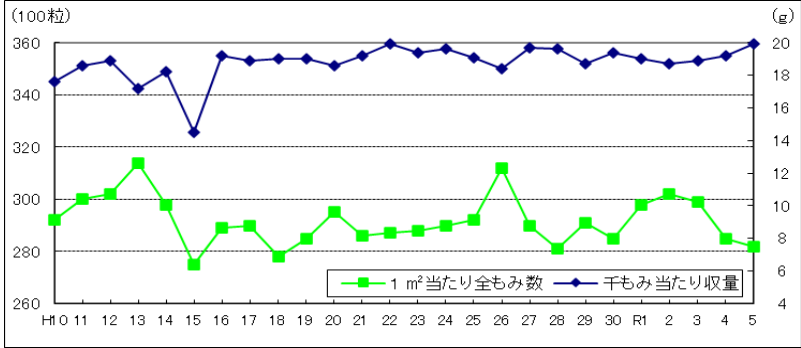
(表3、表4、図2)

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	H19～H25年 平均値 ①	令和元年	2	3	4	5	対前年差	H29～R5年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	18.6	17.4	17.4	17.5	17.4	17.1	△0.3	17.4	93.5	△6.5
1㎡当たり有効穂数(本)	431	457	450	430	395	390	△5.0	425	98.6	△1.4
1穂当たりもみ数(粒)	67.2	65.2	67.1	69.5	72.2	72.3	0.1	68.8	102.4	2.4
1㎡当たり全もみ数(百粒)	289	298	302	299	285	282	△3.0	292	101.0	1.0
千もみ当たり収量(g)	19.3	19.0	18.7	18.9	19.2	19.9	0.7	19.0	98.4	△1.6
玄米千粒重(g)	21.7	21.5	21.2	21.6	22.2	22.0	△0.2	21.8	100.5	0.5
10a当たり玄米重(kg)	557	565	565	565	547	562	15.0	558	100.2	0.2
前40日平均気温(℃)	0.8	0.7	△0.1	2.1	2.5	3.1	0.6	1.9		1.1
後40日平均気温(℃)	1.3	1.5	2.4	△0.3	0.5	4.2	3.7	0.7		△0.6

資料:作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注:1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注:2 H19～H25年平均値及びH29～R5年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料:作物統計

表4 最近の作柄(平成29年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最況終指数)
H29	○	×	98
30	—	—	101
R1	○	—	103
2	○	×	103
3	○	—	103
4	×	—	99
5	×	◎	104

注:◎:良(多い)、○:やや良(やや多い)、
—:平年並み、×:やや不良(やや少ない)、
※:不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

高品質・良食味米の安定生産に向け、以下の指導が行われている。

- 品種特性を踏まえた品種の作付、低温障害回避のため適期移植の指導。
- 有機物による土作り、追肥の適正実施の指導(土壌診断に基づく補給型施肥(収穫等によっては場外に持ち出される分だけを補給)及び追肥時期・追肥量の適正な実施(ひとめぼれ、あきたこまち、いわてっこ、銀河のしずくは幼穂形成期に2kg/10aを上限、どんぴしゃりは幼穂形成期に2kg/10aを基本)等を推進)。

宮 城（前回変動:令和3年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

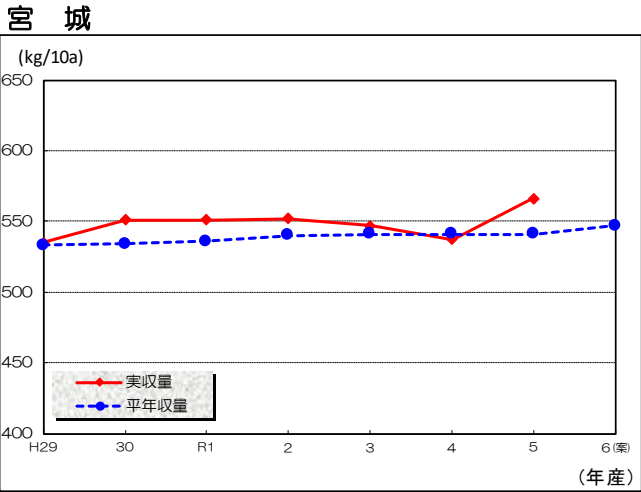
令和 6 年産水稻の10a当たり平年収量は547kg（対前年差+ 6 kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であることや、冷害による極端な減収リスクが低下し、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

宮城県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図 1）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



宮 城	H29	30	R1	2	3	4	5	6(案)
実収量	535	551	551	552	547	537	566	
7中5平均	548 (7)							
平年収量	533	534	536	540	541	541	541	547
前年差	2	1	2	4	1	0	0	6

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「つや姫」、「げんきまる」、「萌えみのり」が増加傾向にあり、令和 6 年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表 1）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R1	2	3	4	5
ひとめぼれ	557	73.7	72.6	70.6	70.8	69.6
						- 1.0
つ や 姫	594	7.1	7.2	8.3	8.2	8.6
						+0.3
ササニシキ	576	5.8	5.8	6.5	6.4	6.5
まなむすめ	576	4.1	4.9	4.8	5.0	5.3
						+0.5
萌えみのり	660	1.5	1.8	1.8	1.9	1.9
						+0.1
げんきまる	630	1.2	1.5	1.6	1.6	1.8
						+0.2

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表 2）

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R1	2	3	4	5
南部	523	10.1	9.9	10.3	10.4	10.4
中部	533	18.7	18.6	18.3	18.3	18.3
北部	557	59.3	59.4	59.5	59.3	59.3
東部	551	12.0	12.1	12.0	12.0	12.0

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 収量構成要素と作柄の推移

収量構成要素については、平成19年から25年の平均値と平成29年から令和5年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が3.1ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が4.8ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は1.4ポイント増加している。

近年の温暖化により「やませ」等低温による被害が大きく減少している。さらに、気温が高めに推移する傾向にあるため、県内全域において、近年の収量水準が平年収量を上回って推移している。

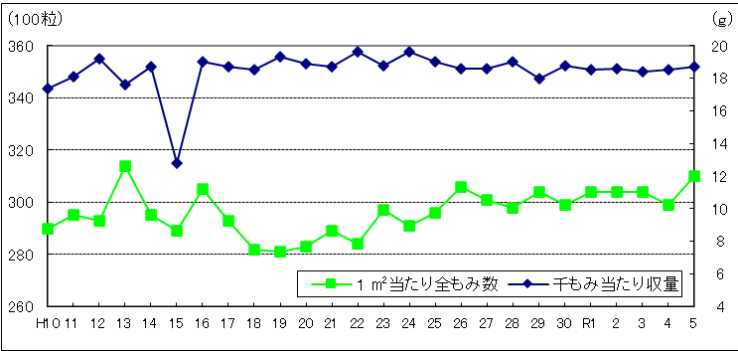
(表3、表4、図2)

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	H19～H25年 平均値 ①	令和元年	2	3	4	5	対前年差	H29～R5年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	18.0	16.8	17.2	17.0	17.0	16.8	△0.2	17.0	94.4	△5.6
1㎡当たり有効穂数(本)	436	464	448	437	418	420	2.0	442	101.4	1.4
1穂当たりもみ数(粒)	66.5	65.5	67.9	69.6	71.5	73.8	2.3	68.5	103.0	3.0
1㎡当たり全もみ数(百粒)	289	304	304	304	299	310	11.0	303	104.8	4.8
千もみ当たり収量(g)	19.1	18.5	18.6	18.4	18.5	18.7	0.2	18.5	96.9	△3.1
玄米千粒重(g)	21.7	21.2	20.9	21.4	22.3	21.7	△0.6	21.5	99.1	△0.9
10a当たり玄米重(kg)	552	563	564	558	552	579	27.0	560	101.4	1.4
前40日平均気温(℃)	0.6	0.2	△0.4	1.7	3.3	3.5	0.2	2.1		1.5
後40日平均気温(℃)	1.2	1.7	2.5	△0.2	0.5	4.1	3.6	1.0		△0.2

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 H19～H25年平均値及びH29～R5年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表4 最近の作柄(平成29年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最況終指数)
H29	○	※	99
30	○	—	101
R1	○	×	102
2	○	—	102
3	○	—	101
4	—	—	100
5	○	○	105

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、
—：平年並み、×：やや不良(やや少ない)、
※：不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

高品質・良食味米の安定生産に向け、以下の指導が行われている。

- ・ 高温登熟による品質低下への対策として晩期栽培(遅植え)の推進。
- ・ 適正な水管理、土づくりの励行、適正な栽植密度・肥培管理等の推進。
- ・ 大規模化に対応した熟期の異なる品種構成の導入等の推進。

山 形 （前回変動:令和2年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

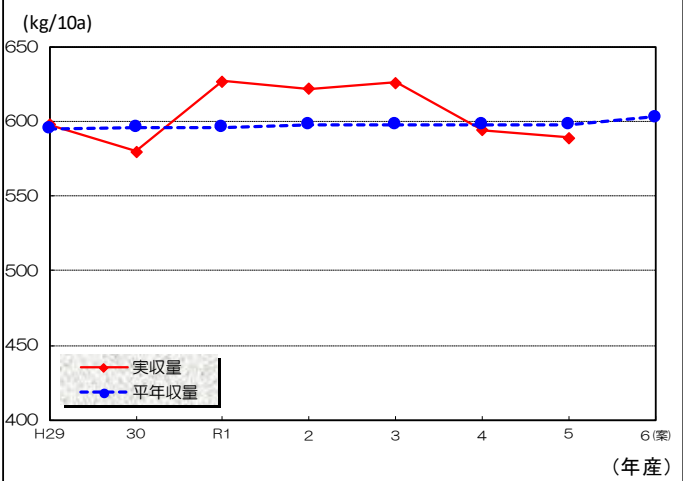
令和 6 年産水稻の10a当たり平年収量は603kg（対前年差＋ 5 kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であることや、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

山形県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図 1）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準
山 形



山 形	H29	30	R1	2	3	4	5	6(案)
実収量	598	580	627	622	626	594	589	
7中5平均	606 (8)							
平年収量	595	596	596	598	598	598	598	603
前年差	0	1	0	2	0	0	0	5

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「雪若丸」、「つや姫」が増加傾向にあり、令和 6 年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表 1）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R1	2	3	4	5
はえぬき	618	61.1	61.2	61.2	61.1	60.6
						-0.6
つや姫	596	14.6	14.8	14.9	15.4	15.6
						+0.8
雪若丸	641	3.7	4.7	5.1	5.4	6.1
						+1.4
ひとめぼれ	575	8.0	7.8	7.7	7.2	6.9
						-0.9
コシヒカリ	542	4.3	3.9	3.8	3.5	3.2
						-0.7

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

表 2 作柄地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R1	2	3	4	5
村山	624	22.8	22.6	22.7	22.6	22.6
最上	574	15.7	15.6	15.6	15.5	15.5
置賜	604	20.3	20.3	20.1	20.1	20.1
庄内	607	41.2	41.5	41.6	41.8	41.8

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表 2）

(3) 収量構成要素と作柄

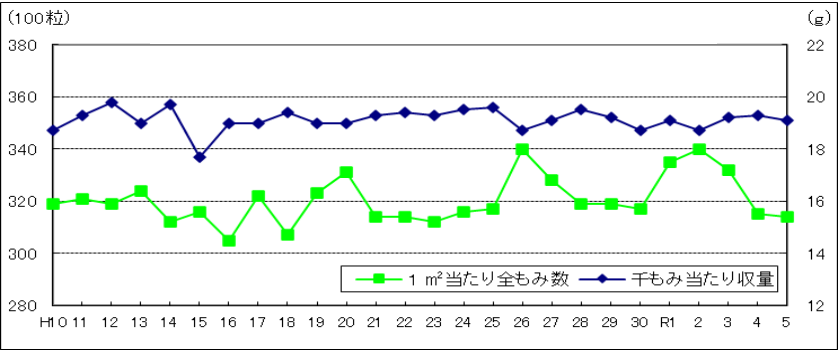
収量構成要素については、平成19年から25年の平均値と平成29年から令和5年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が1.0ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が2.2ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は1.0ポイント増加している。
(表3、表4、図2)

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	H19～H25年 平均値 ①	令和元年	2	3	4	5	対前年差	H29～R5年 平均値 ②	③= ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	19.7	19.3	19.3	19.5	19.3	19.1	△0.2	19.3	98.0	△2.0
1㎡当たり有効穂数(本)	471	520	509	491	464	457	△7.0	480	101.9	1.9
1穂当たりもみ数(粒)	67.8	64.4	66.8	67.6	67.9	68.7	0.8	67.6	99.7	△0.3
1㎡当たり全もみ数(百粒)	317	335	340	332	315	314	△1.0	324	102.2	2.2
千もみ当たり収量(g)	19.3	19.1	18.7	19.2	19.3	19.1	△0.2	19.1	99.0	△1.0
玄米千粒重(g)	21.8	21.6	21.0	21.8	22.2	21.4	△0.8	21.7	99.5	△0.5
10a当たり玄米重(kg)	613	640	637	639	608	600	△8.0	619	101.0	1.0
前40日平均気温(℃)	0.7	0.6	△0.2	1.9	2.6	2.3	△0.3	1.8		1.1
後40日平均気温(℃)	1.1	1.6	2.6	△0.2	0.6	4.2	3.6	0.9		△0.2

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 H19～H25年平均値及びH29～R5年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表4 最近の作柄(平成29年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最況終指)数
H29	○	×	100
30	—	×	96
R1	◎	—	105
2	◎	—	104
3	○	○	104
4	×	○	99
5	×	○	100

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、
—：平年並み、×：やや不良(やや少ない)、
※：不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

高品質・良食味米の安定生産に向け、以下の指導が行われている。

- ・ 土づくりの推進、健苗育成、適正な水管理・施肥の徹底。
- ・ 土壌診断等に基づき、適正な施用量となるように指導。
- ・ つや姫、雪若丸は、初期生育の確保、登熟期の水管理と適期刈取等の徹底。

福 島（前回変動:令和3年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

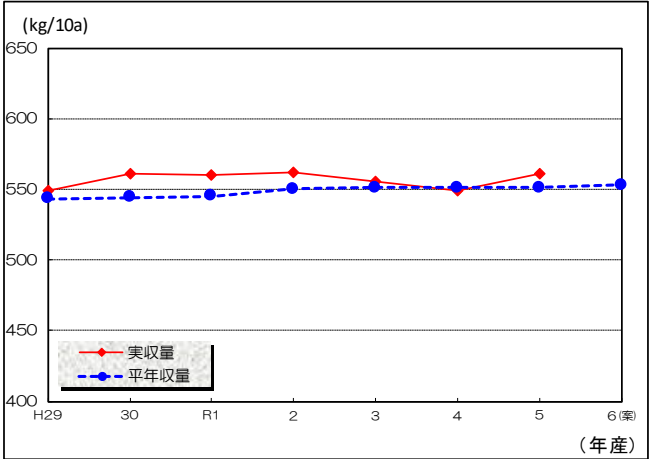
令和 6 年産水稻の10a当たり平年収量は553kg（対前年差+ 2 kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が定着していることや、冷害による極端な減収リスクが低下し、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

福島県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図 1）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準
福 島



福 島	H29	30	R1	2	3	4	5	6 (案)
実収量	549	561	560	562	555	549	561	
7中5平均	557 (6)							
平年収量	543	544	545	550	551	551	551	553
前年差	1	1	1	5	1	0	0	2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「天のつぶ」が定着しており、令和 6 年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表 1）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R1	2	3	4	5
コシヒカリ	557	55.5	53.5	52.3	53.7	54.1
ひとめぼれ	593	20.3	19.3	18.7	19.7	19.2
天のつぶ	630	14.7	16.8	18.6	16.0	16.3

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表 2）

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R1	2	3	4	5
中通り	538	54.5	54.0	53.9	53.6	53.7
浜通り	521	11.4	11.6	11.7	11.4	11.6
会 津	598	34.1	34.4	34.4	35.0	34.7

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 収量構成要素と作柄

収量構成要素については、平成19年から25年の平均値と平成29年から令和5年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が2.1ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が4.1ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は2.0ポイント増加している。

また、近年の温暖化により「やませ」等低温による被害が大きく減少しているほか、気温が高めに推移する傾向にあるため、近年の収量が平年収量を上回って推移している。

(表3、表4、図2)

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

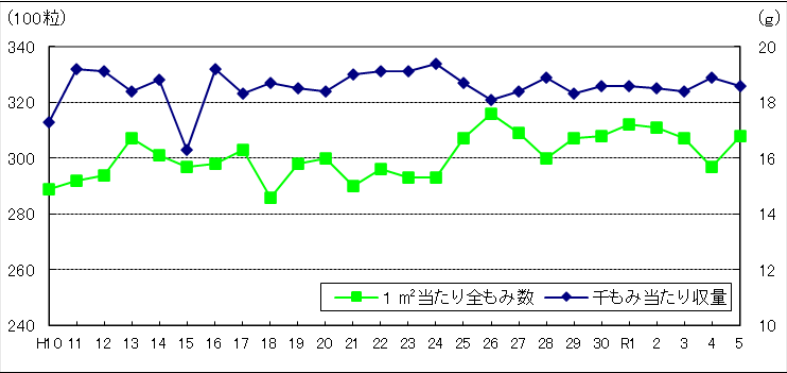
	H19～H25年 平均値 ①	令和元年	2	3	4	5	対前年差	H29～R5年 平均値 ②	③= ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	17.8	16.8	16.8	16.7	16.6	16.4	△0.2	16.8	94.4	△5.6
1㎡当たり有効穂数(本)	390	414	404	396	381	388	7.0	398	102.1	2.1
1穂当たりもみ数(粒)	76.0	75.4	77.0	77.5	78.0	79.4	1.4	77.2	101.6	1.6
1㎡当たり全もみ数(百粒)	296	312	311	307	297	308	11.0	308	104.1	4.1
千もみ当たり収量(g)	18.9	18.6	18.5	18.4	18.9	18.6	△0.3	18.5	97.9	△2.1
玄米千粒重(g)	21.9	21.8	21.4	21.9	22.0	21.8	△0.2	21.8	99.5	△0.5
10a当たり玄米重(kg)	559	579	575	566	561	574	13.0	570	102.0	2.0
前40日平均気温(℃)	0.7	0.6	△0.2	1.5	1.9	2.9	1.0	1.7		1.0
後40日平均気温(℃)	1.2	1.3	2.8	△0.8	1.3	3.6	2.3	1.0		△0.2

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。

注：2 H19～H25年平均値及びH29～R5年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表4 最近の作柄(平成29年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作況最終指数)
H29	○	×	101
30	○	×	103
R1	○	—	103
2	○	—	102
3	○	×	101
4	—	—	100
5	○	—	102

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、
—：平年並み、×：やや不良(やや少ない)、
※：不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

高品質・良食味米の安定生産に向け、以下の指導が行われている。

- ・ 品種の市場性、冷害危険度等を総合的に考慮した適地適作の推進。
- ・ 土壌診断に基づくカリ施用、堆肥の施用による土づくり、緩効性肥料使用時の適切な追肥等の指導。

新 潟（前回変動:令和3年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

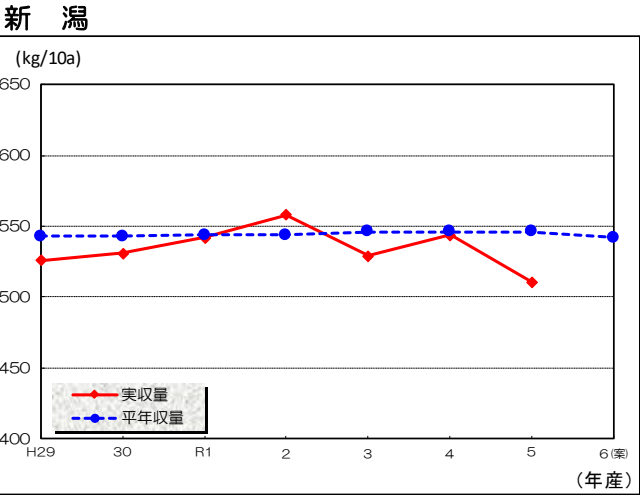
令和6年産水稻の10a当たり平年収量は542kg（対前年差－4kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

新潟県における近年の10 a 当たり収量については平年収量を下回って推移している。（図1）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



新 潟	H29	30	R1	2	3	4	5	6(案)
実収量	526	531	542	558	529	544	511	
	7中5平均 534 (-12)							
平年収量	543	543	544	544	546	546	546	542
前年差	2	0	1	0	2	0	0	-4

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、大きな変化はみられない。（表1）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R1	2	3	4	5
コシヒカリ	528	64.7	63.7	62.8	62.6	62.5
こしいぶき	587	17.0	16.6	16.5	16.3	16.0
ゆきん子舞	633	3.9	4.3	4.4	4.5	4.5
新之助	574	2.3	2.6	3.0	3.3	4.0
*こがねもち	546	2.0	2.2	2.6	2.6	2.6
つきあかり	656	2.0	2.2	2.6	3.0	3.3
*わたぼうし	571	1.8	1.8	2.0	2.0	2.0

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。
3 *印はもち米である。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R1	2	3	4	5
下越	568	48.7	48.8	49.1	49.1	49.1
中越	540	33.9	33.8	33.8	33.9	33.9
上越	538	12.6	12.7	12.4	12.3	12.4
佐渡	528	4.8	4.7	4.7	4.7	4.6

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 収量構成要素と作柄

収量構成要素については、平成19年から25年の平均値と平成29年から令和5年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が1.0ポイント増加しているものの、千もみ当たり収量が1.1ポイント減少している結果、10a当たり玄米重は1.1ポイント減少している。

なお、近年は出穂後の高温がマイナス要因となっており、例えば、令和3年産は出穂期のフェーン現象による高温、令和5年産は出穂期から登熟期にかけて継続的な高温で減収している。

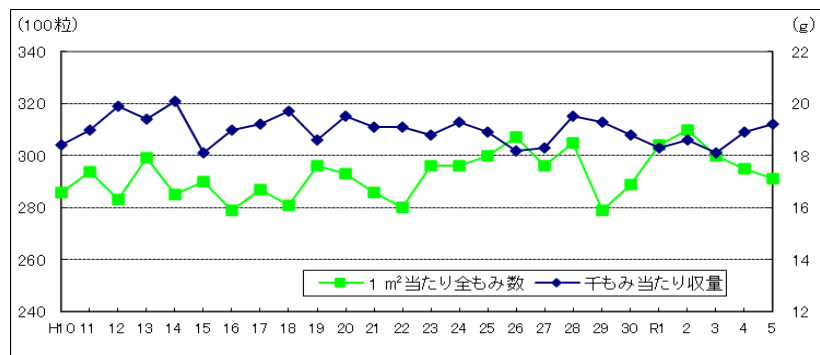
(表3、表4、表5、図2)

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	H19～H25年 平均値 ①	令和元年	2	3	4	5	対前年差	H29～R5年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	16.8	17.0	16.8	16.5	16.7	16.6	△0.1	16.7	99.4	△0.6
1㎡当たり有効穂数(本)	363	391	372	371	377	360	△17.0	371	102.2	2.2
1穂当たりもみ数(粒)	80.8	77.7	83.3	80.9	78.2	80.8	2.6	79.7	98.6	△1.4
1㎡当たり全もみ数(百粒)	293	304	310	300	295	291	△4.0	296	101.0	1.0
千もみ当たり収量(g)	19.0	18.3	18.6	18.1	18.9	19.2	0.3	18.8	98.9	△1.1
玄米千粒重(g)	21.5	21.2	21.0	21.6	21.9	21.2	△0.7	21.5	100.0	0.0
10a当たり玄米重(kg)	558	556	576	542	559	560	1.0	552	98.9	△1.1
前40日平均気温(℃)	0.7	0.8	△0.4	1.8	2.6	2.1	△0.5	1.7		1.0
後40日平均気温(℃)	1.0	1.4	2.4	△0.4	0.7	3.9	3.2	0.8		△0.2

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 H19～H25年平均値及びH29～R5年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表4 最近の作柄(平成29年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作況最終指数)
H29	×	—	96
30	×	×	95
R1	○	×	100
2	○	—	103
3	—	×	96
4	×	○	99
5	×	○	95

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、
—：平年並み、×：やや不良(やや少ない)、
※：不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

高品質・良食味米生産推進のため、以下の指導が行われている。

- 品質低下等のリスク分散を図るため、複数品種の導入、播種・移植時期の分散
- 田植え時期に合わせた適期播種
- 適期の中干し・溝切りの実施
- 生育診断に基づく適期な穂肥施用

表5 H19-H25平均値とH29-R5平均値の気温差

		新潟市			生育 ステージ
		平均気温	最高気温	最低気温	
8月	第1半旬 1～5	1	1.5	0.2	出穂最盛期
	第2半旬 6～10	1.5	2.6	1	出穂・開花期
	第3半旬 11～15	-0.1	0.1	0.2	登熟期
	第4半旬 16～20	-1.1	-0.8	-1	
	第5半旬 21～25	1.9	2.4	1.7	
	第6半旬 26～31	-0.3	-0.3	-0.4	

山 梨（前回変動:平成19年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

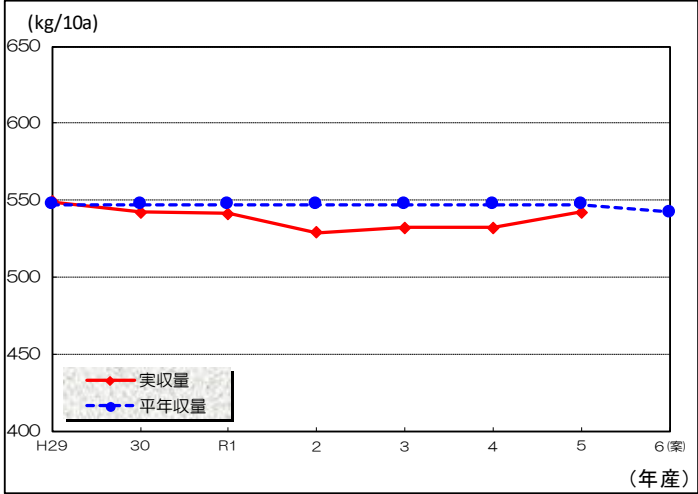
令和 6 年産水稻の10a当たり平年収量は542kg（対前年差－ 5 kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の低い品種が増加傾向であることや、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

山梨県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を下回って推移している。（図 1）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準
山 梨



山 梨	H29	30	R1	2	3	4	5	6(案)
実収量	549	542	541	529	532	532	542	
	7中5平均 538 (-9)							
平年収量	547	547	547	547	547	547	547	542
前年差	0	0	0	0	0	0	0	-5

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

(2) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、収量水準は高くないものの、良食味でもあり、作期分散の観点で「ヒノヒカリ」への移行が増加傾向にあり、令和 6 年産も同様の傾向になるものと考えられる。

（表 1）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H19	R1	2	3	4	5
コシヒカリ	552	68.2	63.7	65.3	65.2	65.3	65.1
							- 3.1
ヒノヒカリ	507	0.0	10.9	11.5	7.2	13.4	14.0
							+14.0
あさひの夢	511	8.8	9.2	8.2	4.7	8.1	8.0
							- 0.8
ひとめぼれ	563	8.1	3.9	4.3	3.5	3.8	3.3
							- 4.8
農林48号	595	0.0	2.3	2.9	3.4	2.0	2.6
							+2.6

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 収量構成要素と作柄

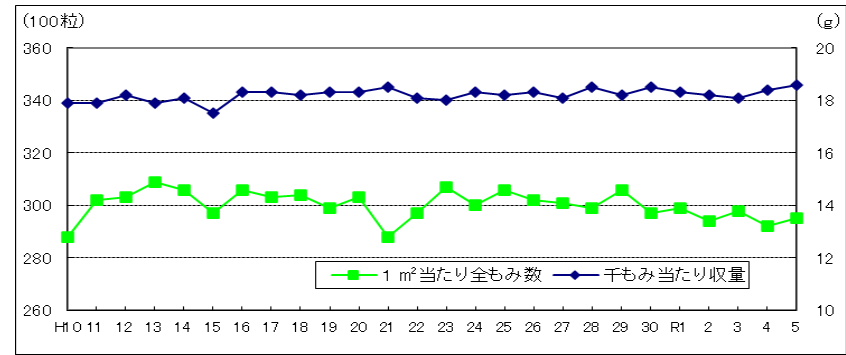
収量構成要素については、平成19年から25年の平均値と平成29年から令和5年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が0.5ポイント増加しているものの、1㎡当たり全もみ数が1.3ポイント減少している結果、10a当たり玄米重は0.7ポイント減少している。（表2、表3、図2）

表2 収量構成要素及びアメダスデータ

	H19～H25年 平均値 ①	令和元年	2	3	4	5	対前年差	H29～R5年 平均値 ②	③= ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数（株）	18.0	16.5	16.6	16.7	17.0	16.8	△ 0.2	16.7	92.8	△ 7.2
1㎡当たり有効穂数（本）	390	378	377	379	360	374	14.0	377	96.7	△ 3.3
1穂当たりもみ数（粒）	76.5	79.1	78.0	78.6	81.1	78.9	△ 2.2	78.7	102.9	2.9
1㎡当たり全もみ数（百粒）	301	299	294	298	292	295	3.0	297	98.7	△ 1.3
千もみ当たり収量（g）	18.2	18.3	18.2	18.1	18.4	18.6	0.2	18.3	100.5	0.5
玄米千粒重（g）	21.1	21.3	20.9	21.4	21.8	21.9	0.1	21.4	101.4	1.4
10a当たり玄米重（kg）	548	547	535	538	538	549	11.0	544	99.3	△ 0.7
前40日平均気温（℃）	0.8	0.0	△ 0.3	0.8	1.9	2.2	0.3	1.3		0.5
後40日平均気温（℃）	0.9	1.3	2.4	△ 0.6	0.9	1.8	0.9	0.9		0.0

資料：作物統計、アメダスデータ（気象庁）
注：1 アメダスデータ（平均気温）は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均（対平年差）。
注：2 H19～H25年平均値及びH29～R5年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表3 最近の作柄（平成29年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作況最終指数）
H29	—	×	100
30	×	—	99
R1	—	—	99
2	×	—	97
3	—	×	97
4	×	—	97
5	×	○	100

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

(参考) 栽培技術等の動向

高温による品質低下防止のため、以下の指導が行われている。

- ・ 適期は種、適期移植
- ・ 適正な水管理
- ・ 適期収穫

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

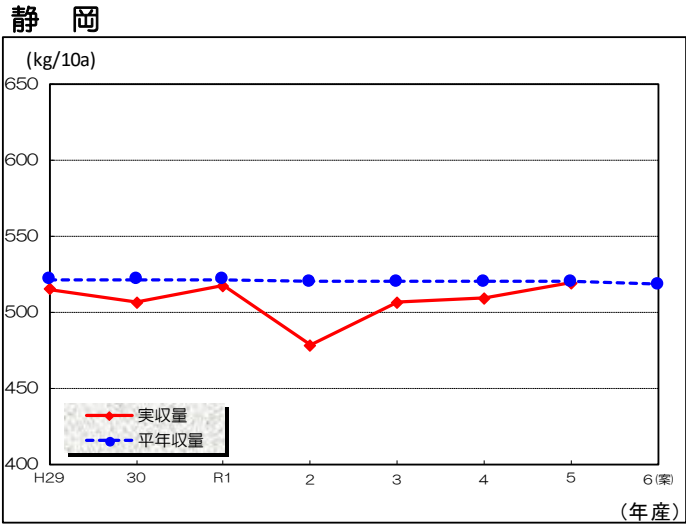
令和6年産水稻の10a当たり平年収量は518kg（対前年差－2kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

静岡県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を下回って推移している。（図1）

図1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



静岡県	H29	30	R1	2	3	4	5	6(案)
実収量	515	506	517	478	506	509	519	
7中5平均	511 (-9)							
平年収量	521	521	521	520	520	520	520	518
前年差	0	0	0	-1	0	0	0	-2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

(2) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「あいちのかおりSBL」、「きぬむすめ」、収量水準は高くないものの、良食味の「キヌヒカリ」、高温耐性が強く良食味の「にこまる」等でそれぞれ増減が見られる。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R1	2	3	4	5
コシヒカリ	497	44.5	43.4	40.9	42.9	42.6
						-0.8
あいちのかおりSBL	524	13.7	12.3	10.8	9.9	9.2
						-3.1
きぬむすめ	527	15.3	16.5	17.2	18.5	18.2
						+1.7
キヌヒカリ	505	7.5	7.0	6.7	5.5	3.8
						-3.2
にこまる	518	6.1	7.4	7.3	7.3	7.5
						+0.1
ひとめぼれ	514	3.7	3.7	3.5	3.5	2.7
						-1.0

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 収量構成要素と作柄

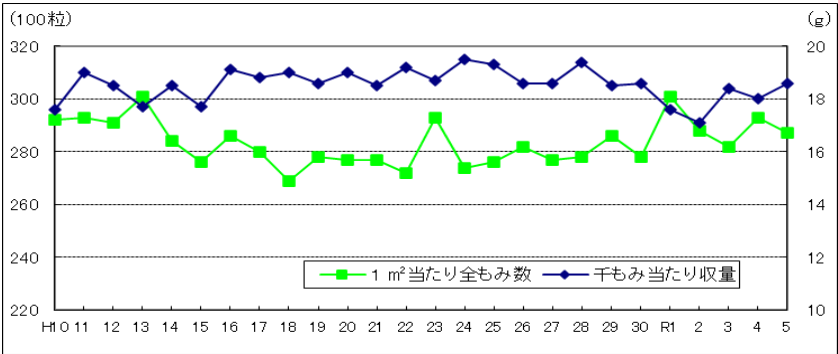
収量構成要素については、平成19年から25年の平均値と平成29年から令和5年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が4.0ポイント増加しているものの、千もみ当たり収量が4.2ポイント減少している結果、10a当たり玄米重は0.4ポイント減少している。
(表2、表3、図2)

表2 収量構成要素及びアメダスデータ

	H19～H25年 平均値 ①	令和元年	2	3	4	5	対前年差	H29～R5年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	18.3	16.9	17.2	16.9	17.2	17.1	△0.1	17.1	93.4	△6.6
1㎡当たり有効穂数(本)	369	367	351	356	362	358	△4.0	360	97.6	△2.4
1穂当たりもみ数(粒)	75.1	82.0	82.1	79.2	80.9	80.2	△0.7	80.0	106.5	6.5
1㎡当たり全もみ数(百粒)	276	301	288	282	293	287	△6.0	287	104.0	4.0
千もみ当たり収量(g)	19.0	17.6	17.1	18.4	18.0	18.6	0.6	18.2	95.8	△4.2
玄米千粒重(g)	22.1	21.2	20.8	22.4	22.0	22.1	0.1	21.9	99.1	△0.9
10a当たり玄米重(kg)	526	530	492	518	526	533	7.0	524	99.6	△0.4
前40日平均気温(℃)	0.6	0.0	△0.4	0.7	1.6	2.0	0.4	1.1		0.5
後40日平均気温(℃)	0.9	1.4	2.1	△0.4	0.8	1.6	0.8	0.9		0.0

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 H19～H25年平均値及びH29～R5年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表3 最近の作柄（平成29年度以降）

年次	全もみ数	登熟	（作 最 況 終 指 数）
H29	○	×	99
30	—	×	97
R1	◎	※	99
2	○	※	92
3	—	×	97
4	○	×	98
5	—	—	100

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

(参考) 栽培技術等の動向

- 売れる米づくり及び省力・低コストのため、以下の指導が行われている。
- ・ 健苗育成、追肥（穂肥）の適量・適期の徹底。
 - ・ 適期防除・適期刈取り。
 - ・ 基肥一発肥料（側条施肥）導入や疎植栽培の拡大による育苗箱数削減。

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

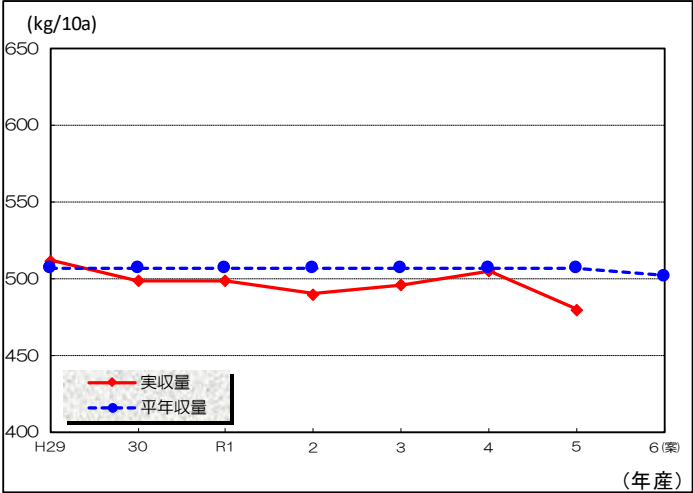
令和 6 年産水稻の10a当たり平年収量は502kg（対前年差－ 5 kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等
によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量
の水準

愛知県における近年の10 a 当たり
収量については、平年収量を下回っ
て推移している。（図 1）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準
愛 知



愛 知	H29	30	R1	2	3	4	5	6(案)
実収量	512	499	499	490	496	505	480	
7中5平均	498 (-9)							
平年収量	507	507	507	507	507	507	507	502
前年差	0	0	0	0	0	0	0	-5

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、前回変動年に比べ「あいちのかおり」、「大地の風」、「ゆめまつり」が増加している。
（表 1）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H20	R1	2	3	4	5
あいちのかおり	513	42.0	46.5	46.4	43.2	43.0	47.8
							+5.8
コシヒカリ	500	29.1	27.0	28.2	27.6	27.8	27.3
							-1.8
ミネアサヒ	514	6.0	6.7	7.3	5.8	5.6	6.8
							+0.8
大地の風	516	0.0	3.7	3.7	5.6	6.0	3.2
							+3.2
ゆめまつり	512	0.0	3.4	3.7	3.5	3.3	3.0
							+3.0
あさひの夢	501	9.8	2.6	1.8	2.5	2.8	1.9
							-7.9

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表 2）

表 2 作柄地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R1	2	3	4	5
尾 張	492	48.7	48.5	47.9	47.8	48.0
西三河	508	34.0	34.1	34.6	34.8	34.7
東三河	494	17.3	17.4	17.5	17.4	17.3

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 収量構成要素と作柄

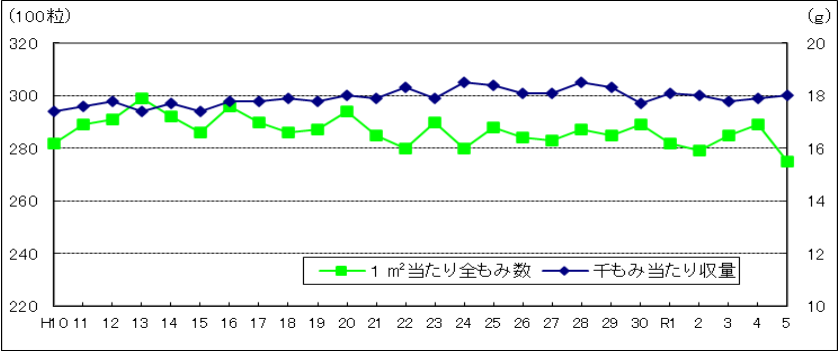
収量構成要素については、平成19年から25年の平均値と平成29年から令和5年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が0.7ポイント減少し、千もみ当たり収量も0.6ポイント減少している結果、10a当たり玄米重は1.5ポイント減少している。
(表3、表4、図2)

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	H19～H25年 平均値 ①	令和元年	2	3	4	5	対前年差	H29～R5年 平均値 ②	③= ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	17.6	17.1	16.8	16.9	17.0	16.9	△0.1	16.9	96.0	△4.0
1㎡当たり有効穂数(本)	382	376	358	368	379	358	△21.0	372	97.4	△2.6
1穂当たりもみ数(粒)	75.2	75.0	77.9	77.4	76.3	76.8	0.5	76.3	101.5	1.5
1㎡当たり全もみ数(百粒)	286	282	279	285	289	275	△14.0	284	99.3	△0.7
千もみ当たり収量(g)	18.1	18.1	18.0	17.8	17.9	18.0	0.1	18.0	99.4	△0.6
玄米千粒重(g)	21.9	22.0	21.7	22.1	22.3	22.9	0.6	22.1	100.9	0.9
10a当たり玄米重(kg)	518	510	502	507	517	496	△21.0	510	98.5	△1.5
前40日平均気温(℃)	0.9	0.8	0.6	0.7	1.0	1.9	0.9	1.1		0.2
後40日平均気温(℃)	1.0	1.5	1.7	0.2	1.5	2.2	0.7	1.1		0.1

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 H19～H25年平均値及びH29～R5年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表4 最近の作柄(平成29年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最況終指数)
H29	—	—	101
30	○	×	98
R1	—	—	98
2	×	×	96
3	—	×	98
4	—	—	100
5	×	—	96

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、
—：平年並み、×：やや不良(やや少ない)、
※：不良(少ない)

- (参考) 栽培技術等の動向
- 高品質米生産に向けて、施肥改善と基本技術の励行
 - 過剰な生育を抑制するため、適正な栽植密度の確保等

和歌山（前回変動:令和元年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

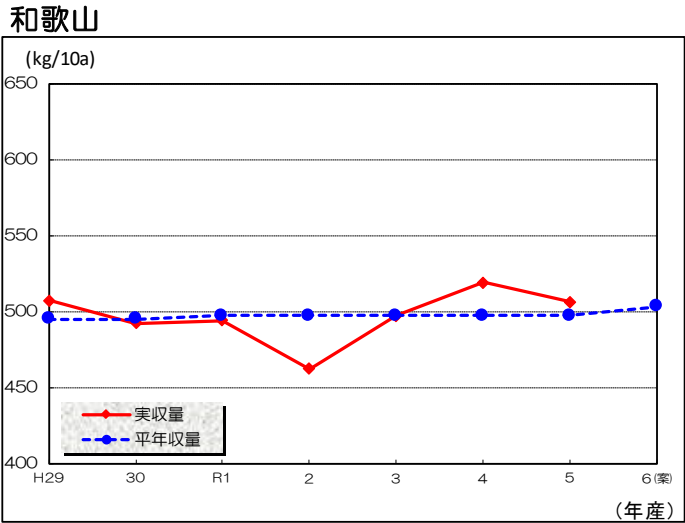
令和6年産水稻の10a当たり平年収量は503kg（対前年差+6kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10a当たり収量と平年収量の水準

和歌山県における7中5平均の10a当たり収量については、平年収量を上回っている。（図1）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



和歌山	H29	30	R1	2	3	4	5	6(案)
実収量	507	492	494	462	497	519	506	
7中5平均	499 (2)							
平年収量	495	495	497	497	497	497	497	503
前年差	0	0	2	0	0	0	0	6

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

(2) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「きぬむすめ」「にじのきらめき」などが増加傾向にあり、令和6年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R1	2	3	4	5
キヌヒカリ	508	42.0	41.0	44.0	43.0	41.0
きぬむすめ	554	8.5	9.0	13.0	14.0	18.0
コシヒカリ	423	11.0	11.0	11.0	11.0	10.0
ヒノヒカリ	516	10.0	10.0	10.0	10.0	9.0
にじのきらめき	547	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0
イクヒカリ	490	6.0	6.0	5.0	5.0	4.0
にこまる	583	1.0	2.0	2.0	2.0	3.0

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 収量構成要素と作柄

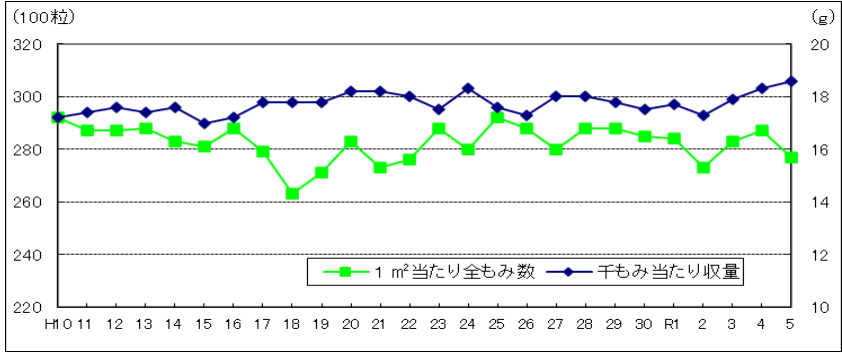
収量構成要素については、平成19年から25年の平均値と平成29年から令和5年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が1.1ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が1.1ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は0.6ポイント増加している。
(表2、表3、図2)

表2 収量構成要素及びアメダスデータ

	H19～H25年 平均値 ①	令和元年	2	3	4	5	対前年差	H29～R5年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	17.3	15.8	15.6	15.6	15.3	14.9	△0.4	15.7	90.8	△9.2
1㎡当たり有効穂数(本)	367	351	335	337	345	329	△16.0	346	94.3	△5.7
1穂当たりもみ数(粒)	76.5	80.9	81.5	84.0	83.2	84.2	1.0	81.7	106.8	6.8
1㎡当たり全もみ数(百粒)	280	284	273	283	287	277	△10.0	283	101.1	1.1
千もみ当たり収量(g)	18.0	17.7	17.3	17.9	18.3	18.6	0.3	17.8	98.9	△1.1
玄米千粒重(g)	21.8	21.6	20.9	22.3	22.2	22.3	0.1	22.0	100.9	0.9
10a当たり玄米重(kg)	505	504	473	507	526	514	△12.0	508	100.6	0.6
前40日平均気温(℃)	0.4	△0.2	△0.5	0.2	1.1	1.2	0.1	0.7		0.3
後40日平均気温(℃)	0.7	0.9	1.6	△0.4	1.3	1.0	△0.3	0.8		0.1

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 H19～H25年平均値及びH29～R5年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表3 最近の作柄(平成28年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最況終指数)
H29	○	—	102
30	—	×	99
R1	—	—	99
2	×	×	92
3	—	—	100
4	—	○	105
5	×	○	103

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、
—：平年並み、×：やや不良(やや少ない)、
※：不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

良質米生産に向け、以下の指導が行われている。

- ・ 適期移植
- ・ 適量施肥

島 根 （前回変動:平成30年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

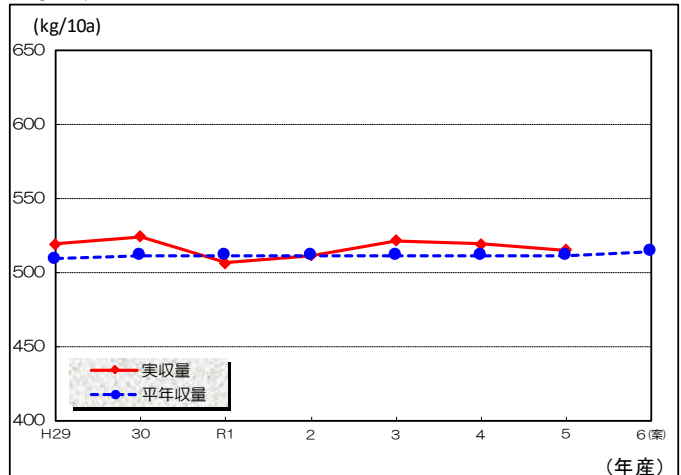
令和 6 年産水稻の10a当たり平年収量は514kg（対前年差+ 3 kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

島根県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図 1）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準
島 根



島 根	H29	30	R1	2	3	4	5	6(案)
実収量	519	524	506	511	521	519	515	
7中5平均	517 (6)							
平年収量	509	511	511	511	511	511	511	514
前年差	0	2	0	0	0	0	0	3

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、「コシヒカリ」から、収量水準の高い「きぬむすめ」、「つや姫」への移行が増加傾向にあり、令和 6 年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表 1）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H30	R1	2	3	4	5
コシヒカリ	503	58.7	56.5	54.5	51.9	48.1	47.8
きぬむすめ	542	26.7	29.1	31.9	33.5	35.0	36.1
							+9.4
つや姫	525	7.3	7.6	7.7	8.2	9.6	9.1
							+1.8

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近 7 か年のうち最高及び最低を除いた 5 か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

表 2 作柄地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R1	2	3	4	5
出雲	524	70.2	70.6	70.8	71.0	71.3
石見	499	29.8	29.4	29.2	29.0	28.7

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近 7 か年のうち最高及び最低を除いた 5 か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表 2）

(3) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

収量構成要素については、平成19年から25年の平均値と平成29年から令和5年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が3.7ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が8.2ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は2.9ポイント増加している。

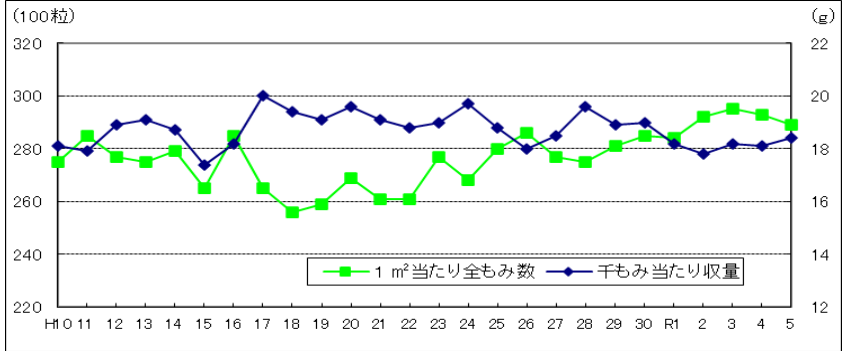
（表3、表4、図2）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	H19～H25年 平均値 ①	令和元年	2	3	4	5	対前年差	H29～R5年 平均値 ②	③= ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数（株）	17.4	16.3	16.4	16.0	15.9	16.0	0.1	16.2	93.1	△ 6.9
1㎡当たり有効穂数（本）	347	346	347	354	363	334	△ 29.0	349	100.6	0.6
1穂当たりもみ数（粒）	77.6	82.1	84.1	83.3	80.7	86.5	5.8	83.1	107.1	7.1
1㎡当たり全もみ数（百粒）	267	284	292	295	293	289	△ 4.0	289	108.2	8.2
千もみ当たり収量（g）	19.1	18.2	17.8	18.2	18.1	18.4	0.3	18.4	96.3	△ 3.7
玄米千粒重（g）	21.9	21.2	20.7	21.7	21.6	21.4	△ 0.2	21.5	98.2	△ 1.8
10a当たり玄米重（kg）	515	516	520	538	529	532	3.0	530	102.9	2.9
前40日平均気温（℃）	0.7	△ 0.3	△ 0.7	0.8	2.2	1.8	△ 0.4	1.0		0.3
後40日平均気温（℃）	0.7	1.1	2.0	△ 0.4	1.1	2.1	1.0	1.1		0.4

資料：作物統計、アメダスデータ（気象庁）
注：1 アメダスデータ（平均気温）は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均（対前年差）。
注：2 H19～H25年平均値及びH29～R5年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

年次	全もみ数	登熟	（作最況終）指数
H29	○	—	102
30	○	○	103
R1	—	×	99
2	○	×	99
3	○	×	100
4	○	×	101
5	—	○	101

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

(参考) 栽培技術等の動向

高品質・良食味米の安定生産に向け、以下の指導が行われている。

- ・ 健苗の育成
- ・ 地域別・品種別適期移植
- ・ 適正な肥培管理

福岡（前回変動:平成29年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

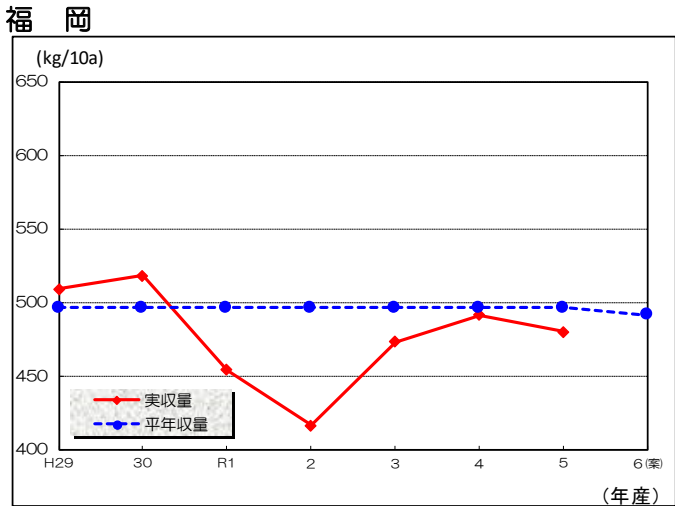
令和6年産水稻の10a当たり平年収量は491kg（対前年差－5kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10a当たり収量と平年収量の水準

福岡県における近年の10a当たり収量については、平年収量を下回って推移している。（図1）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



福岡	H29	30	R1	2	3	4	5	6(案)
実収量	509	518	454	416	473	491	480	
	7中5平均 481 (-15)							
平年収量	496	496	496	496	496	496	496	491
前年差	-1	0	0	0	0	0	0	-5

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、比較的単収水準の高い「ヒノヒカリ」の作付割合が減少し、「ヒノヒカリ」に比べ比較的単収水準の低いものの、食味が良い「夢つくし」の作付割合が増加している。令和6年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)						
		H29	30	R1	2	3	4	5
ヒノヒカリ	494	33.1	33.3	31.8	31.3	30.6	29.9	32.0
								-1.1
夢つくし	483	38.5	38.3	38.5	39.1	40.1	41.0	39.2
								+0.7
元気つくし	500	18.4	18.7	19.5	20.2	19.9	19.5	19.7
								+1.3
*ヒヨクモチ	556	3.2	3.0	2.8	2.7	2.7	2.6	2.6
								-0.6
実りつくし	540	0.6	1.0	1.6	1.1	1.4	1.4	1.2
								+0.6

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、地帯間差があり、令和6年産は収量水準の高い地帯の作付面積の割合が低くなるが見込まれる。（表2）

表2 作柄地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R1	2	3	4	5
福岡	466	16.7	16.7	16.7	16.7	16.6
北東部	475	38.3	38.4	38.6	39.1	39.4
筑後	492	45.0	44.9	44.6	44.2	43.9

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 収量構成要素と作柄

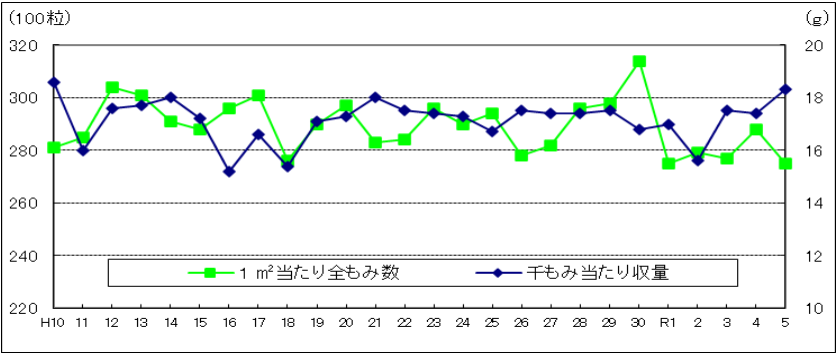
収量構成要素については、平成19年から25年の平均値と平成29年から令和5年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が2.7ポイント減少し、千もみ当たり収量も0.6ポイント減少している結果、10a当たり玄米重は1.4ポイント減少している。
(表3、表4、図2)

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	H19～H25年 平均値 ①	令和元年	2	3	4	5	対前年差	H29～R5年 平均値 ②	③= ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	17.1	16.1	16.3	16.1	16.2	16.0	△0.2	16.2	94.7	△5.3
1㎡当たり有効穂数(本)	376	346	342	365	364	345	△19.0	362	96.3	△3.7
1穂当たりもみ数(粒)	77.4	79.5	81.6	75.9	79.1	79.7	0.6	78.8	101.8	1.8
1㎡当たり全もみ数(百粒)	291	275	279	277	288	275	△13.0	283	97.3	△2.7
千もみ当たり収量(g)	17.3	17.0	15.6	17.5	17.4	18.3	0.9	17.2	99.4	△0.6
玄米千粒重(g)	21.6	21.0	20.5	21.7	21.6	21.9	0.3	21.4	99.1	△0.9
10a当たり玄米重(kg)	503	467	434	484	502	503	1.0	496	98.6	△1.4
前40日平均気温(℃)	0.7	0.5	0.2	△0.2	1.2	1.4	0.2	1.0		0.3
後40日平均気温(℃)	0.7	0.8	0.6	1.1	1.2	2.3	1.1	0.9		0.2

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 H19～H25年平均値及びH29～R5年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表4 最近の作柄(平成29年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最況終指数)
H29	○	—	102
30	◎	×	104
R1	※	×	91
2	×	※	80
3	※	○	98
4	×	○	100
5	※	◎	100

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、
—：平年並み、×：やや不良(やや少ない)、
※：不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

品質向上に向け、以下の指導が行われている。

- ・ 適期移植
- ・ 中干し・間断灌水・落水時期の適正化
- ・ 土壌診断・施肥基準に基づく適正な施肥

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

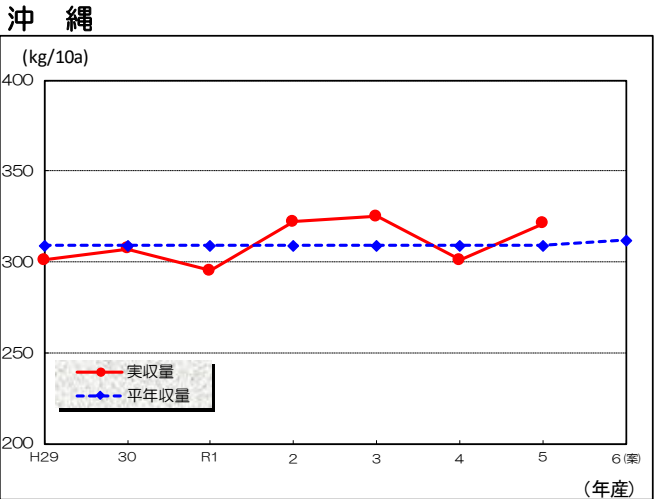
令和 6 年産水稻の10a当たり平年収量は312kg（対前年差+ 3 kg）となった。
 これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であることや、収量水準の高い一期稲の作付面積割合が増加していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

沖縄県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移しつつある。（図 1）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



沖 縄	H29	30	R1	2	3	4	5	6(案)
実収量	301	307	295	322	325	301	321	
7中5平均	310 (1)							
平年収量	309	309	309	309	309	309	309	312
前年差	0	0	0	0	0	0	0	3

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

(2) 品種構成及び作期別の動向

品種構成の動向をみると、多収量品種の北陸193号（泡盛原料用米）が増加傾向にあり、令和 6 年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表 1）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H17	R1	2	3	4	5
ひとめぼれ	385	83.6	79.3	80.5	75.1	74.9	75.1
ちゅらひかり	404	7.0	14.8	11.8	13.3	15.3	11.2
ミルキーサマー	272	0.0	3.2	3.0	5.4	3.4	4.9
北陸193号	445	0.0	0.9	1.4	3.9	4.4	3.7

資料：水稻作況調査結果等
 注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
 2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、高収量の第一期稲の割合が高い傾向となっている。（表 2）

表 2 作期別作付面積割合の動向

作期	(参考) 10a当たり収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R1	2	3	4	5
第一期稲	352	74.7	73.7	72.2	73.7	76.6
第二期稲	184	25.3	26.3	27.8	26.3	23.4

資料：水稻作況調査結果等
 注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
 2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

表3 アメダスデータ

	H19～H25年 平均値 ①	令和元年	2	3	4	5	対前年差	H29～R5年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
前 40 日 平 均 気 温 （℃）	△ 0.3	0.7	△ 0.3	0.8	0.4	0.3	0.0	0.4		0.7
後 40 日 平 均 気 温 （℃）	0.3	0.3	1.0	1.0	0.5	0.3	△ 0.2	0.6		0.3

資料:アメダスデータ(気象庁)
注:アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。

表4 最近の作柄（平成29年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指数）
H29	…	…	97
30	…	…	99
R1	…	…	97
2	…	…	102
3	…	…	105
4	…	…	97
5	…	…	104

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
－：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

沖縄県については、水稻作況標本筆を設置していないことから「…」で示した。

（参考） 栽培技術等の動向
肥培管理・防除等の指導が行われている。